



山川方夫全集

第一卷

小説Ⅰ

冬樹社

山川方夫全集
第一卷

昭和四十四年六月三十日 第一刷発行
昭和四十九年八月三十日 第四刷発行

著者 山川方夫

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二一八

電話 二六四一〇三四六 電 二〇一

振替 東京七七五七

印刷所

三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二一二

製本所

一重製本加工所

東京都中野区本町五一二七一九

装幀 山川みどり

写真 ©芸術生活社 撮影相原亨

目次

バンドの休暇	5
安南の王子	41
仮装	74
娼婦	108
歌束	127
昼の花火	290
春の華客	305
煙突	344
猿	376
遠い青空	400

山川方全集 第一卷

小說
I

バンドの休暇

もう一時間になった。学生は未だに汚ないオオヴァの膝を崩さず、故意わざとのような律気さで固い木の椅子に腰を下ろしている。ときどき輪にし損ねた煙草の烟の向うにその生真面目な顔を眺めながら、道夫は雨漏りに表皮の捲れ上ったテェブルに腰を掛けて、次の部屋でポオカアかなんかをしているらしい「会計係」の「帰り」を先刻から一緒に待っているのである。向い合った青年はこのあいだCホルを代ってもらったバンドの代金を取りに来たそのマスタアの弟だそうだが、厭がらせでしかないその粘りの御相手なんて勝負のない睨めっこみたいな徒らな体力の消耗だ。道夫は白木の壁に貼つてある、新譜や新版の流行歌のレコオドやら日本映画、化粧品、果ては薬品などのポスタアに目を遣った。まるで場末の氷屋みたいな盛況だ。中央に避妊薬の広告が麗々しいのは良くない御愛嬌である。きつと佐伯の趣味であろう。節穴だらけの安っぽい白木の板壁は人の擦れる辺りだけ鼠色に汚れている。

吸っていた煙草を器用に痰壺に弾じくと、両手を後ろに支えて彼は大きく欠伸した。退屈である。金は多分二三日休養すると言ったマスターの佐伯が持つて行つてしまつたのだらう。目を射る馬鹿氣た明るさの二百燭光の裸電球が、ペラペラの安材木の歪んだ二坪程の部屋を隈なく白く耀かせた。

銀座裏の此処が、道夫のクラリネットを受持つてゐるそれでもA級のバンド「リトム・キャンドル」の事務所なのである。薄いベニヤの板壁を隔てた奥の部屋からは、ギターの絃の單調な響きが、何かを賭ける面白そうな声に交じつて時々思ひ出したように聞える。一際高い笑声は桂子である。シンガアの文子の女学校の同級生だ。流れてくる汗臭いニスのような人いきれの生温さが此の部屋の寒さを教える。戸外から時として妙に埃臭くうそ寒い風の吹き込むのは、同じ佐伯の経営の此のバラック・ブルウバード楽譜出版社が埋立地に面しているせいであらう。

指もボキボキ全部鳴らし終つた。青年は黙りこくつてゐる。所在が無い。

「どうしても九時までには歸るつて言つてたんですがね。奴さんダンスかしら……おおい。小林の奴、何処かに寄るつて言つてた？」

馬鹿大い声で道夫は次の部屋に怒鳴つた。いくら何でももう交替してもらわなくては遣り切れない。「言つてたわよォ」

桂子の声である。しかし喧騒は間断なく続いている。

「何だい、じゃ早く……何処へさ？」

「知らないね」

「Cホールに聞かせて来たんですが、お金は昨日佐伯さんに御渡ししたそうですけど」

振返った道夫に白けた笑で青年は肯いた。稀代の甘ちゃんだと謂う兄貴よりは確りしているらしい。先刻迄の、金を取れば勝、という哀願の調子は全く喪われている。

「そう。それは僕も知ってるんですがね」

道夫は無邪気に笑いながら立って扉をノックした。軽佻な音が拳に響く。と、ベニヤの薄い扉が煽られたようにふわりと開いて桂子が出て来た。全身に真新しいトラムプのカアドの匂いがする。

「どうしたのかしらね。……ふふふ、千円儲けちゃった」

唇と瞳に薄く笑を湛えたまま、道夫に合せた視点を逸らさないのは笑うまいとする努力の故に思われる。

「……うん、白田君に済まないだろう？ 此の方弟さんんだけど」

「あらそう？」

桂子は却って不器用に俳優のような仕草で白田を振返った。

「……あら、ハンサムね、あなた。……御兄様より立派よ。……ね、此処のバンドに入んない？ きつと器用なもの、あなた。決ってるわ」

「そうね。君、何か楽器出来る？」

「……ね、ミチ、私何処かで此の人見たことあんのよ……それに誰かに似てんだ、本当に。……ね、そう、ポンに似てない？」

ボンとは小林の渾名である。（球雄という名なのでピンボンのボンを取った訳だ）だが丸っ切り似てなんか居やしない。しかし途方もない桂子の放言に同調して道夫も出鱈目で漫才を続けた。矢張り白田もたじろいで、人並に居心地の悪い客子を見せて来た。それを愉しそうに瞠めた瞳を不意に遷すと、詰るように桂子は道夫に向き直った。

「そうそ、あんた今晚九時半にいい人に逢うとか言ってたじゃないの、あれ嘘？」

「いや嘘なもんか、逢え逢えって五月蠅くてね、あいつ。考えてんだ」

「あら、呆れた。自惚れ切ってるわ。ね、白田さん？ さ、ミチは行きなさい。ふ、どんないい人かしら……そう、私も帰るからそこ迄ついて行こう」

流石に青年は鼻白んだが塑られたように微笑だけは泛べている。気の小さい道夫は少々どぎまぎした。ずるいぞ！ 勝ち逃げだから？ などと言う声が聴えて来て、驕って桂子は嬉しくて堪らない顔で二人のスプリング・コートを抱えて出て来た。道夫のクラリネットのチェスも忘れて居ない。

「どうせもう帰って来るわよ、小林さん。悪いけど約束は約束だしね。……ね、御免なさい？ ……」
そうそ、御兄様に宜敷く、あんたの方がいいなんて言ったの、秘密よ」

たてつづけに喋っている桂子にスプリング・コートを着せかけると扉を開き、
「じゃ失礼、小林の奴が来たら僕が怒ってたと言っといて下さい」

そう言って桂子を送り出しながら、道夫はなかに、さよならあと怒鳴って扉を閉めた。小林のさよならと応じたのが耳に残る。

幅一尺程の溝板を越すと砂利の多い歩き憎い道である。埋立地の真暗な影のなかから斜めに吹きつける風は、春だというのに思いの外冷たい。桂子が襟を立てた。見ると唇を固く結んで笑顔を堪えている。隣のバアの水色の光が豊かな毛の戦いでいる襟に埋めた頬を浮彫している。喉の奥でまだ笑い続けている桂子が道夫を見た。両手で立てた襟を抑えたままのその瞳に既知のようで実は未知の親近感が漾っている。道夫は笑った顔を、春らしい湿気を孕んで低く頭上に迫っている朱砂色のネオンの反映に向けて大股に歩き出した。無意味な一人笑いに化した笑いをまだ続けながら桂子が小走りにその後を追った。総て無言である。両方共照れ臭くなった為らしい。

桂子は未だバンドのメンバアでは無いが、器用な彼女は一応以上に歌もギタアも科こなせたので、一月ほど前文子に引張って来られたまま此頃は「リトム・キャンドル」と行動を共にして居る。半年前、学者だと謂う夫と別れたのだが年齢はまだ二十三であった。そして道夫が、彼の籍の置いてあるK大学の経済学部教授である父に叱られて、或るダンサアと時代遅れなアパアト暮らしを始めたのも恰度半年ほどの昔である。(尤も定石通り女とは半月足らずで別れて居たが)

二人は何故かとても気が合う。それは二人共エゴイストで冷たい故^{せい}以だと桂子は言っていた。が、何としても阿婆擦れた服の似合う現実派の文子よりも、皆に、インテリの子供の意地っ張りの見栄坊のと言われる、此の馬鹿みたいにロマンティックでフランクで女学生みたいにお喋りな桂子と附合い易いのは意外な程である。それは多分、桂子の女らしさの欠乏と、僕が満十九才三ヶ月の子供であ

る故であらう、と道夫は茫漠と考えていた。

アパートは別だが彼と桂子とは同じ大森に帰る。二人は悠っくりと、そろそろ人波の途絶え始めた銀座の街を有楽町に向って歩いていった。入込んだ小路などの、ファッション・ショップや美術商の店頭に必ず立寄る桂子の癖に楽しく同調しながら、ウィンドオの布地を指して、あれスウツにしたらきつと似合うぜ、などと平気で口走る甘えた坊っちゃん坊っちゃんした自分に、道夫は久し振りでのうに懐しく稚い安寧を感じている。別に愛と名付けるべき特別な感情にも思えぬ。

道夫の歎びはこういう無責任な稚さの中にあるのかも知れない。そして彼の外貌上の稚さは、彼に女のスカートの匿れる、無責任で甘えん坊で、その癖エゴイステイクで護身的な彼一流の女への態度を齎していた。それは自分の価値を知悉してすべてを利用する俳優か抜目のない中年男の様に狡猾に彼を立廻らせる。

「あんた知ってる？ 文子のこと」

桂子が突然問い掛けた。

「今日来なかったね」

「マスターと熱海だった」

「へエー、そりゃ月並だね」

「疲れたから二三日休むって言うたでしょう？ マスター。……皆余計疲れて帰って来るさって笑ってるよ」

いいね。全く今の小説其儘じゃないか。と道夫は自分や桂子を含む対象を目に泛べながら笑った。文子が此頃桂子を厄介物視してゐることも確だし、何か企んで佐伯に熱海行を強制したんじゃないのか。……時代の子だね、と道夫は輕薄に呟いた。それらはつまり、新しいが故に直ぐ古くなる安ピカの流行衣裳みたいなものだ。……だが、それに伴う虚脱した淋しさを打消すべき若さが、何故か道夫には欠けていた。

駅の切符売場の処に来ていた。突然道夫は桂子の大きな瞳を正面から向けられた。何時の間にか組んでいた腕は解かれている。

「ミチ、私一寸あなたに相談があるの。大切なことなの」

それが不意だっただけでは無く、道夫は深淵に臨むような畏怖をその語気から享けた。つい今先まで朗かだった桂子が暫く寡黙に自分の靴尖を瞋めながら歩いていたのを急に重く思い出した。先日桂子の前夫が再婚したことを囁いて、腐つてゐるのよ、バカね案外、と続けた昨日の文子の声が彼の耳を過ぎる。

道夫は返事をせずに無邪気な笑顔を造った。それが困った時の彼の癖なのである。ゆっくりとチェスを右脇に持ち替えながら、巫山戯た顔をして彼は天を仰いで嘆息した。淡紅に煙る曇った空である。星も見えぬ。

「相談なの。いいわね？」

責任を取り得る返答も行為も出来ない己れを彼は薙々と感じた。よく人々が他人の中に自分を発見

するように、彼は自分の中に様々な他人を発見する。その誰もが彼であり、誰もが彼ではない。其処に一貫して居るべき自己と謂う絶対の無さが彼を責任ある行為から遠ざけてしまうのだし、これが彼の保身術でもあるのだ。しかも今、桂子に対し、出来ることなら何でもしてあげたいと叫んでいる自分の善意の存在は、猶更自分を信用の置けないものにしてしまう。

「明日……あんた銀座に出る？」

「出るよ」

別に宛がある訳では無い。こうなれば条件反射のように返事することしか出来ないではないか。エゴイストの桂子は却ってその無責任さにも良い理解を示すであらう。

「じゃ、十時、新橋で。……いい？ 判ったね？」

判った、と道夫は肯いた。

そして改札口に向ったとき、二人は言い合わせたように駅前の食品店に食パンを買いに行く筈であったのを同時に思い起こした。二人共アパートの一人暮らしである。面倒臭いので炊事は減多にしない。それに朝寝坊が共通している。

急に普段の朗かさに戻った桂子に合わせて、道夫も、一人程いいものはないね、と浮々した声を出した。強^{あなが}ち^あ負^な惜^なしみでは無いのである。それに和した桂子は悪戯っ子のように眼を輝かせると、ただね、相手無しのキャッチボールみたいなものよ、と大袈裟に肯いて見せて、笑った。

食品店の眩しい照明のなかで道夫は目を細めてパンを選んだ。桂子は隣の店で腸詰の品評に愉し気